

健康文化

健康文化と国際貢献

金子 昌生

日本は新憲法で戦争を放棄した。自衛隊が作られたのも、自国を守るためと云うことである。しかし、PKOで自衛隊が海外に派遣され、後方部隊と云えども、本当の戦争に無関係とは考えにくい。特に最近の台湾海峡の問題では、近隣諸国を刺激している。旧日本軍の悪夢が思い出される故でもあろう。

戦後、日本人はよく働き、お金をためて経済大国になった。そして、外務省が中心となって、OECDとして外国を援助してきた。これは、日本が国民の血税を用い、莫大なお金を湯水の如く、発展途上国にばらまいた。そのお金は、上層部の人の富とはなったかも知れないが、一般市民には恩恵は少なかった様に思われる。

砂漠にまいた水の様なもので、後には何も残っていない。以上のことから、日本は軍事やお金だけでは、国際貢献はできないことが、明らかになったと思う。

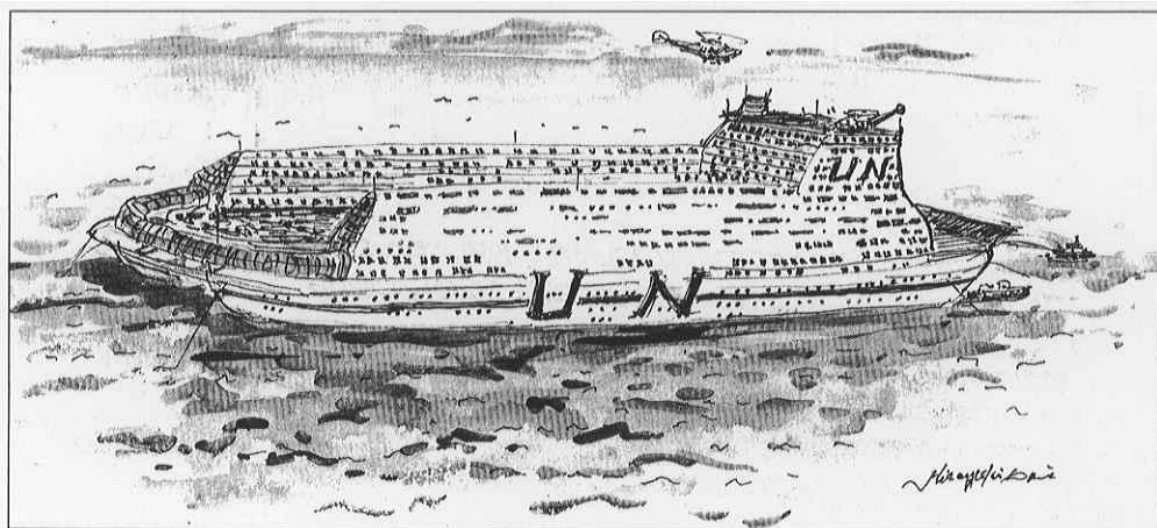
日本の産物は何であるかと考えると人間が特産である。健康文化の支えも、勤勉でよく働く医療人である。江戸時代の漢方医から、蘭学の普及更に、明治維新後の西洋医学の取り込みの速さ、健康文化的に考えれば、医療では、医術は将にアートである。戦争中のレベル・ダウンは戦後アメリカ医学の再吸収により見事に回復し、現在では、日本の医療は、世界のトップレベルに到達しこれを以って、国際貢献が可能となってきた。具体的な方法として、少数の医師が国際医療団に加わって、その威力を発揮すれば良いかもしれない。しかし、戦場や、貧困な土地での一時的な援助は長続きしないし、その国の持つ健康文化に溶け込む医療による国際貢献とは程遠い。

私の持論では、日本の経済力を駆使して巨大病院船を建造し、戦争に関係なく、本当に日本からの医療を求めている国に派遣してその国の健康文化を壊さない配慮を十分持って、医療による国際貢献を行うプランである。病床は1000床、外来や検査室、手術室を完備し、優秀な医師、看護婦、技師、事務関係を含めた1000人に近い医療人の巨大チームが一丸となって国際貢献に尽くすのである。この際、一番重要なことは、病院船はコンピュータ使用に際し安定し

た電力供給可能な発電機や純水製造装置を完備していること、薬剤や食料、医療材料を少なくとも2年分位船底の倉庫に蓄え、最高の医療がいつでも発揮できるように、整備されていなければ意味がない。

このようなアピールは、国際連合（UN）を中心に運営し、日本はUNへの最大協力国であるから、日本からの医療人はすべてUN職員として働き、国際的な日本人として活力を発揮する。

先に派遣した国の健康文化を壊さないと云ったことは、その国の医療制度や、その国の人々が迷惑と思わないことが、前程条件と云うことである。後進国では、その国の医療レベル向上には、教育が必要であり、時間をかけて、その国の健康文化の発展に協力することが望ましい。決して押し付けではなく、日本人として、その国の医療に心底から貢献したい気持ちを理解してもらうことが肝要である。



その船に乗り込んでいる医療人は、その家族も乗船して、安定した生活が保証されていないと良い仕事が出来ない。伝染病など現地固有の疾患に対しても完璧な予防対策がとられている必要がある。現地では、その国の文化とも十分接することが出来て、派遣されている医療人の国際化も達成されるかもしれない。

このようなUN巨大病院船が7つの海を何隻も回遊し、互いに連絡をとりながら、それぞれは専門化しており、遠隔医療も行いながら、より効率的な運用が出来ると良いと思う。

以上の発想は1993年頃から持っており、「先端医療」誌1994年第2号に「日

本の国際貢献をめざした巨大病院船「日本丸」構想として、掲載した。イラストは名古屋出身の土井宏之画伯に描いてもらったものである。

(1997年8月27日 記)

(浜松医科大学教授・放射線医学教室)